

平成 28 年度 研究所奨学論文

応募研究所	政治経済 研究所
論文・作品 テーマ	衆議院選挙における大学偏差値の影響力
フリガナ	タナベ マサヒロ
氏 名 (代表者)	田辺 柁拓 (共同執筆の場合は上記者が代表者となる。代表者他 2 名)
所 属	※研究科・専攻または、学部・学科 政経学部・経済学科 3 年 学生番号：44324

－目次－

No.		※共同執筆の場合のみ記入
1.	はじめに	(担当：田辺)
2.	先行研究	(担当：小山)
3.	理論と仮説の提示	(担当：田辺)
4.	分析モデルと記述統計	(担当：小山・大庭)
5.	分析結果	(担当：小山)
6.	結論と今後の展望	(担当：田辺)
7.		(担当：)
8.		(担当：)
9.		(担当：)
10.		(担当：)

応募期日：平成 28 年 10 月 28 日(金) 23:00 必着【厳守】

1. はじめに

2009 年頃から日本は大学全入時代となり、多くの人が大学に進学するようになった。その傾向は 2014 年度の衆議院議員総選挙において表れており、約 90% の候補者が大卒者である。

従来、選挙に関する研究では、学歴は社会的変数として中卒、高卒、大卒といった教育等級によって扱われてきた。しかし、候補者の出身大学という観点から選挙を分析した研究は見当たらない。そこで本論の目的は、2014 年度の衆議院議員総選挙において、候補者が卒業した大学の偏差値に着目し、大学間の偏差値の違いに焦点を置くことで、それらが候補者の得票率に影響をあたえるかを明らかにすることである。

本論では、高い偏差値の大学を卒業した候補者がそうでない候補者よりも選挙で優勢であるのかどうかを検証する。また、その候補者が出馬する選挙区の「都市度」¹ を使って、都会の有権者よりも田舎の有権者は、候補者の出身大学の偏差値を重視する傾向があるかどうかを交差項を用いて分析を行った。それらの分析結果として、候補者が卒業した大学の偏差値が高ければ、候補者の得票率も高いということがわかった。また、田舎の選挙区であるほど候補者が出身大学の偏差値が高ければ、候補者が得票することがわかった。

本論の構成は以下の通りである。第 2 節では、学歴と有権者の投票行動に関する先行研究を紹介する。第 3 節では、前節で紹介した先行研究から導かれる理論と仮説を提示する。第 4 節では、本論で使用するデータに関して説明する。第 5 節では分析結果を示し、第 6 節では結論並びに今後の展望について述べる。

2. 先行研究

本稿では、学歴と有権者の投票行動に関する 3 つの先行研究を紹介する。第一に、有権者の投票行動原理に関してミシガン・モデルがある。ミシガン・モデルの基本構造は「年齢、学歴、職業、宗教、人種などといった社会学的要因が政党帰属意識という心理的要因を形成し政党帰属意識が政策争点態度や候補者評価を形成し、投票に結びつく」と考える（山田・飯田，2009，p78）。つまり、有権者は候補者のプロフィールから候補者を評価して投票していると考えられる。

第二に、候補者のイメージと投票行動に関して三宅は、短期的に限り、有権者が投票する際の決定要因として、候補者イメージであると結論づけている（三宅，1995，p44）。つまり、「経歴」、「学歴」、「年齢」などの候補者のイメージが投票する際の基幹となっていると考えられている。

第三に、候補者が選挙で当選する要因に関して浅野は、小選挙区下で候補者が大学を卒業していることは、そうでない候補者よりも当選する傾向にあると述べている（浅野，2006，p85）。また、上記で述べた傾向は 2005 年衆院選において低下しているとデータにて示唆している。そのことから年々、候補者の最終学歴レベルによる分析を行う意味は低下していると考えられる。

上記で述べた先行研究は、いずれも候補者の学歴が教育等級によるもので大学偏差値の差による分析は行っていない。そこで本論では、候補者の学歴の中でも卒業した大学の偏差値に注目した。

3. 理論と仮説の提示

本論では、候補者の卒業した大学偏差値が候補者の得票率にどのように影響するかを分析するために、先行研究で述べたミシガン・モデルと同じ

理論を用いる。

理論：

有権者は候補者に関するイメージによって投票する。

本論における「イメージ」とは、候補者が卒業した大学の偏差値を指す。その定義の理由として、薬師院は、「現代人にとって、イメージこそが現実なのである。なかでも学歴というイメージは、人々にとって現実的なイメージである」と述べている(薬師院,1995)。つまり、人々はイメージがその人を示す本性とみなし、その中でも学歴が重要である。

理論から以下の仮説を引き出すことができる。

仮説 1:

2014 年衆議院議員総選挙において候補者が卒業した大学の偏差値が高いほど候補者の得票率が高い。

また、「地方に行けば行くほど有権者は候補者の学歴を投票の判断材料にする」(藤堂,2016,42p)という記事がある。しかし、これは実証的に分析されたものではない。そこで、仮説 2 を導き出し、交差項を用いて分析する。

仮説 2:

都会よりも田舎の方が候補者の出身大学の偏差値が得票率に与える影響が強い。

4. 分析モデルと記述統計

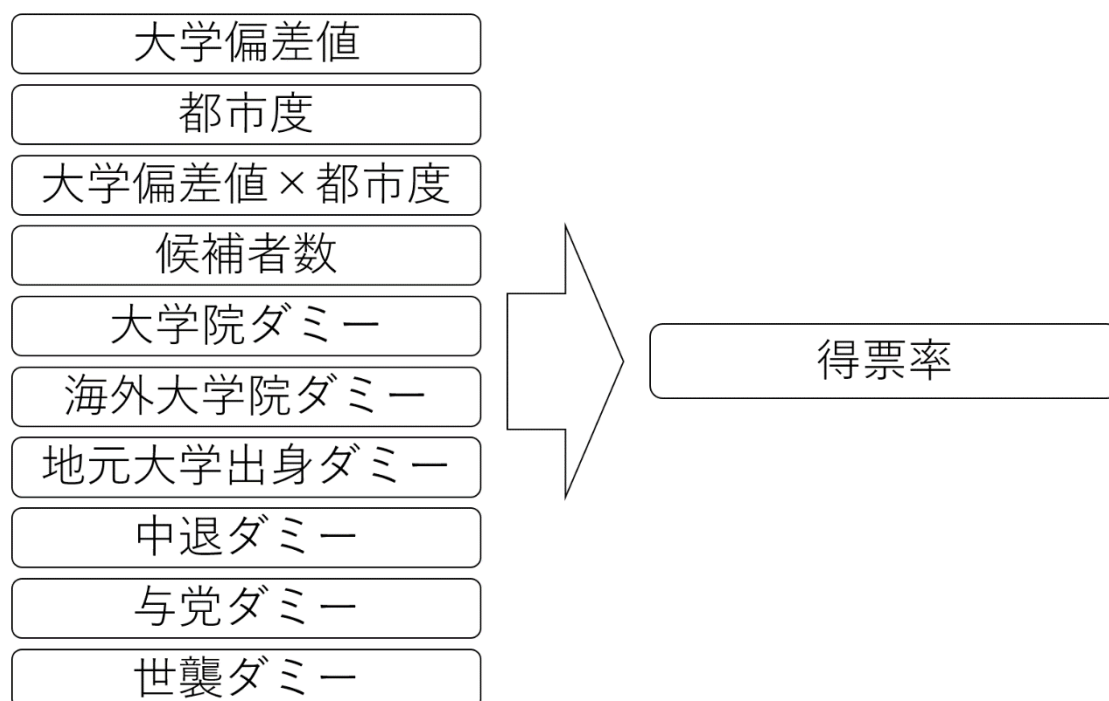


図 1 分析モデル

図 1 は、本稿の分析モデルである。このモデルでは、2014 年度の衆議院総選挙における候補者の得票率を従属変数とした。ここでの候補者とは、上記の選挙における選挙区選出議員を指し、比例区選出議員は分析から除外した。除外する理由は、本論の分析目的として候補者個人のイメージが有権者の投票意識に与える影響であり、政党名を記入する比例区選挙は分析対象として不適切なためである。

主要な独立変数は、候補者が卒業した大学の偏差値である。ここでの偏差値は、複数の学部偏差値データを参考に、「兵庫県学習塾」が割り出した 2016 年度の概算値を、著者が候補者の卒業した大学ごとに平均化した値を用いた。

候補者の得票率に対して影響を与えるコントロール変数として、正の影響あたえるであろう「大学院ダミー」「海外大学院ダミー」「与党ダミー」「世襲ダミー」を、負の影響をあたえるであろう「候補者数」「中退ダミ

一」を考慮し、設定した。

また、「都市度」と「大学偏差値×都市度」に関しては、交差項を用いる上で、田舎と都会で異なった変化を確認するため設定した。

変数名	観測数	平均	標準偏差	最小値	最大値
大学偏差値	821	62.90	9.66	35	76.2
都市度	959	65.99	29.20	8	100
候補者数	959	3.46	0.86	2	7
大学院ダミー	959	0.10	0.30	0	1
海外大学院ダミー	959	0.02	0.15	0	1
地元大学出身ダミー	959	0.25	0.43	0	1
中退ダミー	959	0.03	0.18	0	1
与党ダミー	959	0.30	0.46	0	1
世襲ダミー	959	0.08	0.28	0	1

表 1 記述統計

表 1 は、本稿の記述統計である。2014 年度衆議院総選挙における小選挙区の候補者 959 名全てを分析対象とした。大学偏差値の観測数 821 名は、中卒者・高卒者・不明を欠損値として除いた候補者数である。海外大学院を卒業した候補者²に関して、候補者が日本の大学を卒業している場合、国内大学を最終学歴として扱っている。各ダミー変数は、該当するならば 1、そうでない場合を 0 として割り振っている為、最小値 0、最大値 1 となっている。

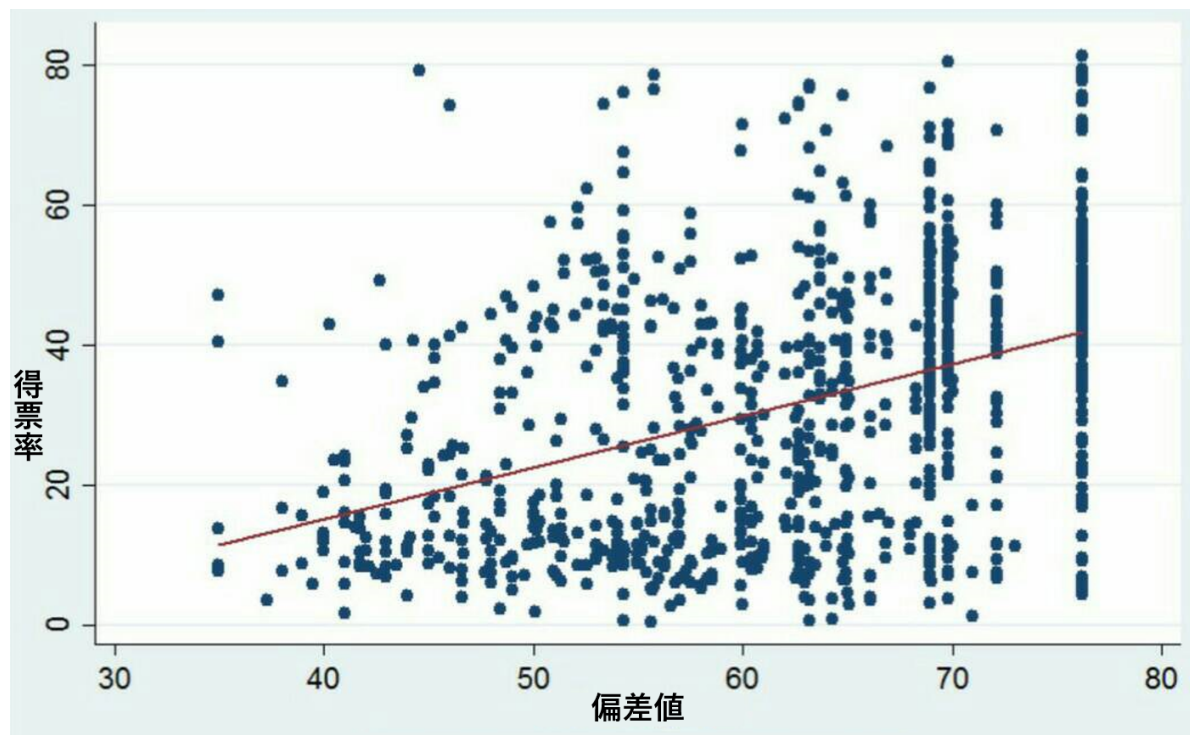


図 2 「得票率」と「候補者が卒業した大学偏差値」の散布図

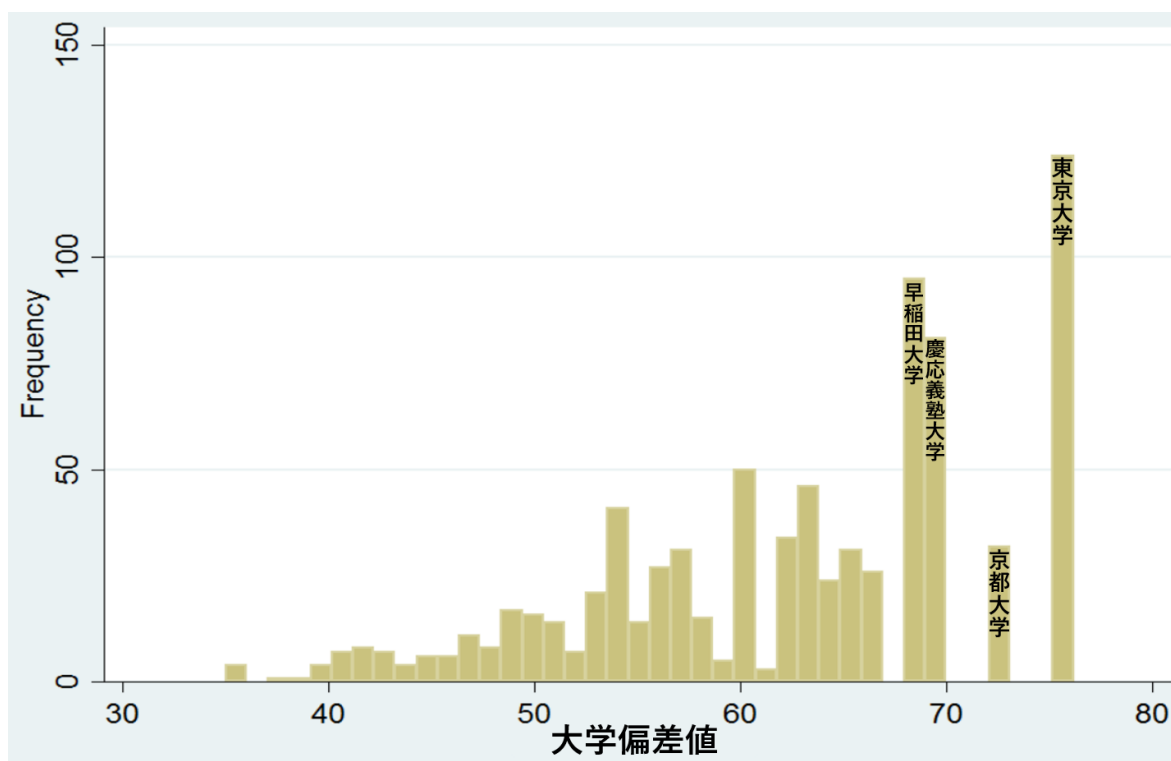


図 3 候補者が卒業した大学候補者のヒストグラム

図 2 は、候補者の得票率と候補者が卒業した大学の偏差値の相関を示した散布図である。縦軸は候補者の得票率を表しており、上にいくほど候補者の得票率が高いことを示している。横軸は候補者が卒業した大学の偏差値を表しており、右に行くほど候補者が卒業した大学の偏差値が高いことを示している。相関係数は 0.39 であり、正の相関が見られ候補者が卒業した大学の偏差値が候補者の得票率に影響していることが示唆される。

図 3 は、2014 年度における候補者が卒業した大学の偏差値別の割合を示したヒストグラムである。大学偏差値の上位には、「東京大学」(123 人)が偏差値 76.2、次いで「京都大学」(32 人)が偏差値 72.1、「慶應義塾大学」(74 人)の偏差値 69.8、「早稲田大学」(87 人)の偏差値 68.9 の計 4 校が挙げられ、全体の約 34%を占めている。

5. 分析結果

5.1 重回帰分析

分析結果は、表 2 のモデル 1 のとおりである。予想したとおり候補者が卒業した大学の偏差値とその候補者の得票率には正の相関があることが分かった。表の候補者が卒業した大学の偏差値の係数 0.50 が示しているのは、偏差値が 1 上昇するごとに候補者の得票率が 5.0 パーセントポイント増加することを意味している。このことは、候補者が卒業した大学の偏差値が 1%で統計的に有意であることから候補者が卒業した大学の偏差値が高くなるほど得票率は高くなると言える。

「地元大学出身ダミー」、「世襲ダミー」、「与党ダミー」、「候補者数」の各変数は 1 %で統計的に有意性が得られた。しかし「大学院ダミー」、「海外大学院ダミー」、「中退ダミー」の各変数では統計的な有意性が得られなかった。

5.2 交差項を用いた重回帰分析

上記同様、表 2 のモデル 2 は、「偏差値×都市度」³の交差項と「都市度」を含めた重回帰分析を行った結果である。候補者が卒業した大学の偏差値の係数 0.93 が示しているのは候補者が卒業した大学の偏差値が 1 上昇するごとに 9.3 パーセンテージポイント増加することを意味している。このことは、候補者が卒業した大学の偏差値という変数が 1%で有意であることから田舎であることや都会であることに関わらず、上記のモデル 1 と同様に、候補者が卒業した大学の偏差値は高くなるほど候補者の得票率も高くなるということができる。

偏差値×都市度の交差項は 1 %の有意水準で統計的に有意な結果を得ることができた。つまり、候補者の得票率に与える候補者が卒業した大学の偏差値の影響は「都市度」の違いによって異なるということである。そのことは、図 4 を見ると明らかである。図 4 の縦軸は、候補者の得票率、横軸は候補者が卒業した大学の偏差値を示している。二本の傾きは、選挙区ごとに異なった変数によって候補者が卒業した大学の偏差値の影響力の大きさを示しており、「田舎」の傾き(0.7)が「都会」の傾き(0.33)よりも大きいことから「田舎」の方が「都会」よりも影響力が大きいということがわかる。

なぜ偏差値の影響は「都会」よりも「田舎」の方が大きいのかという理由に対し二つの見解が考えられる。一つ目に「田舎」では、「都会」よりも大学への進学率が低く、高い偏差値の大学や有名大学の肩書は都会よりも希少性を持つと考えられる。そのため、「都会」よりも「田舎」では、一種の学歴信仰が存在するという背景があると考えられる。二つ目に候補者の可視性に関して三宅は、「都市化された地域では、社会ネットワークの密度が人口に比して粗く、かつ人口移動が急速だから、候補者の可視性

が低いはずである」と主張している。つまり、「田舎」では「都会」に比べ人を通じて候補者の情報を得る機会が多いことが考えられる。しかし、「都会」では「田舎」に比べ人と人との関係性が密接ではなく、人口の流動性も高い。そのことから、「都会」の有権者は「田舎」の有権者よりも候補者イメージの影響を受けにくいと考えられる。

変数名	予測	モデル 1	beta値	モデル 2	beta値
偏差値	+	0.50*** [11.81] (0.000)	0.26	0.93*** [9.05] (0.000)	0.48
都市度				0.38*** [4.33] (0.000)	0.60
偏差値×都市度	－			－0.01*** [－4.57] (0.000)	－0.67
候補者数	－	－5.56*** [－11.88] (0.000)	－0.25	－5.39*** [－10.57] (0.000)	－0.25
大学院ダミー	+	0.52 [0.41] (0.683)	0.01	0.49 [0.40] (0.693)	0.01
海外大学院ダミー	+	－1.72 [－0.66] (0.507)	－0.01	－1.46 [－0.57] (0.569)	－0.01
地元大学出身ダミー	+	－2.49*** [－2.59] (0.010)	－0.05	－1.91** [－1.98] (0.048)	－0.04
中退ダミー	－	－3.86* [－1.85] (0.065)	－0.04	－4.52** [－2.19] (0.029)	－0.05
与党ダミー	+	21.63*** [23.85] (0.000)	0.55	21.19*** [23.49] (0.000)	0.54
世襲ダミー	+	8.19*** [5.70] (0.000)	0.13	8.07*** [5.68] (0.000)	0.13
Prob > F		0.00		0.00	
補正R ²		0.64		0.65	

***p<.01 **p<.05 *p<.1

モデル1とモデル2のセル内の3つの数字は上からそれぞれ係数,[t値],[p値]を表している

表 2 分析結果

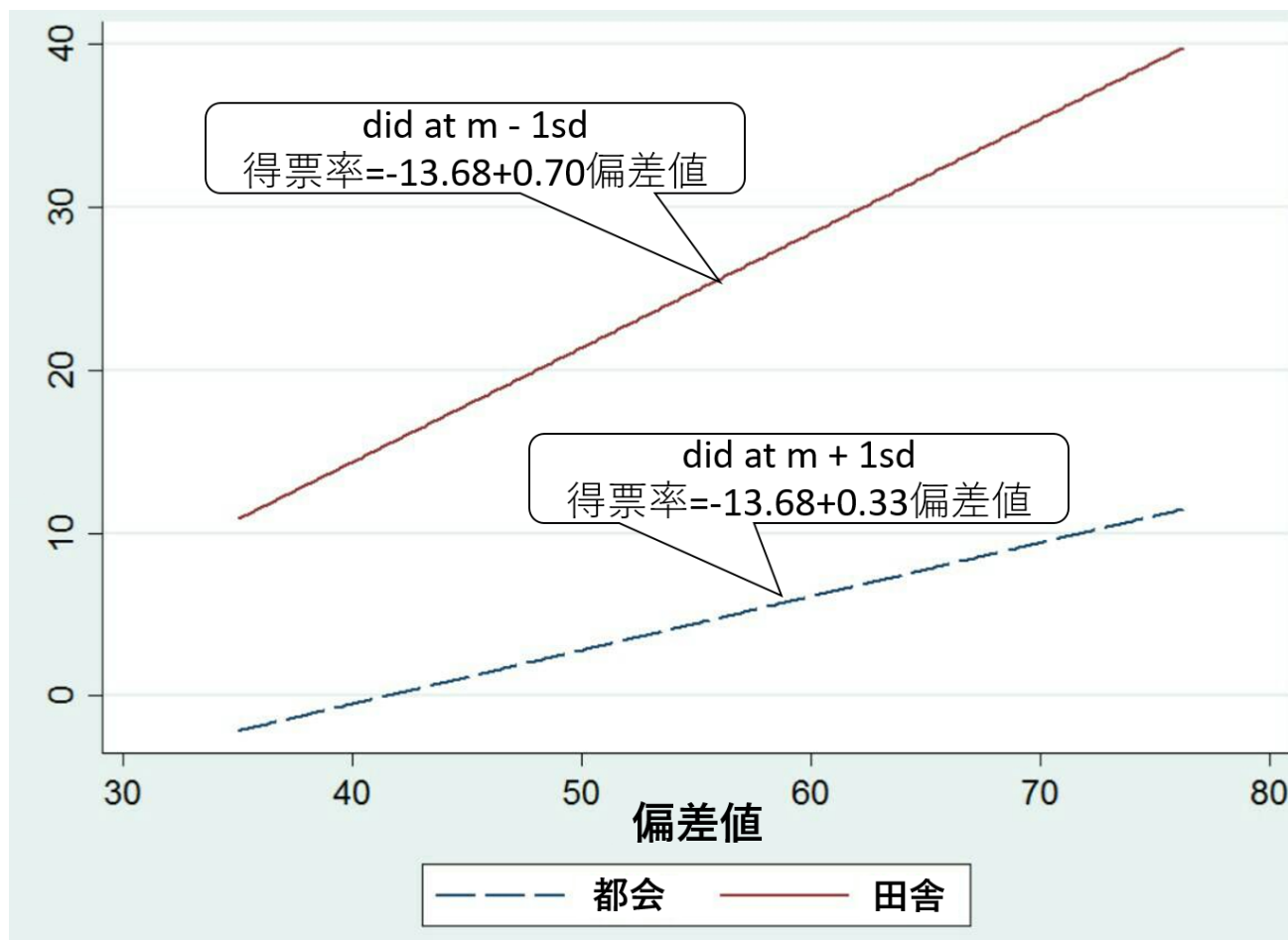


図 4 「都市度」を含んだ得票率と候補者が卒業した大学偏差値の関係

6. 結論と今後の展望

本論では、候補者のイメージを候補者が卒業した大学の偏差値として扱い、候補者が卒業した大学の偏差値が候補者の得票率に影響をあたえるのかという問いに関して考察をしてきた。候補者が卒業した大学の偏差値と候補者の得票率の間には、統計的に有意な関係にあることがわかった。故に、「候補者が卒業した大学の偏差値が高いほどその候補者の得票率は高くなる」と、いう一つ目の仮説を支持するものとなった。

また、本論では、上記で述べたことを基に選挙区ごとに異なった変化をしているかどうかも考察してきた。候補者が卒業した大学の偏差値の程度

に関わらず、「田舎」の有権者は「都会」の有権者よりも候補者が卒業した大学の偏差値の影響が強く出る」という二つ目の仮説を支持するものとなった。本論は、当選するために学歴は重要であるが年々低下の傾向にある(浅野,2006)という指摘を基に、「候補者の学歴」の近似値として「候補者が卒業した大学の偏差値」を使い分析を行った。その結果、「候補者が卒業した大学の偏差値」は「学歴」の近似値として扱うことができるということがわかった。

今後の課題として上記のことを基に、参議院選挙や地方選挙にて同様の傾向があるかどうか検証する必要がある。また年々、偏差値の重要度が高まっているという傾向があるか否かということも検証する余地がある。

本論では、候補者が卒業した大学の偏差値を考察してきたが、「大卒」だけでなく「高卒」、「中卒」、「大学院」といった変数を偏差値化することができれば、より信頼度の高い研究ができると考えられる。本論における一番の問題点として、なぜ「田舎」の有権者の方が「都会」の有権者よりも候補者の卒業した大学の偏差値を重要視する傾向があるのかについてのメカニズムは解明できなかったことである。

注

- ¹ DID データに関しては Steven Reed 教授(中央大),Danniel Smith 教授(ハーバード大)からデータ提供を受けた。
- ² 東京 1 区から出馬している自民党の山田美樹は、ハーバード大学院を卒業しているが、東京大学を卒業している為、最終学歴は東京大学の偏差値データとして扱っている。
- ³ 「都会」は都市度の平均+1 標準偏差で示され、「田舎」は都市度の平均-1 標準偏差で示されている。

参考文献

兵庫県学習塾.(2016)

”大学偏差値データ”<http://daigakujuuken.boy.jp/>. (2016-8-1)

産経ニュース.(2016)

“候補者データ”<http://www.sankei.com/politics/election2014.html>.

(2016-8-1)

久米郁男・川出良枝・古城佳子・田中愛治・真淵勝『政治学』

東京:有斐閣, 2011

R・F・ドーア『偏差値社会－新しい文明病』東京:岩波書店, 1998.

渡辺良智『学歴社会における学歴』東京:青山学院短期大学紀要, 2006.

藤堂勁『お笑い総選挙』東京:飛鳥新社, 2016.

浅野正彦『市民社会における制度改革』東京:慶應義塾大学出版会株式会社,2006.

三宅一郎『日本の政治と選挙』東京:東京大学出版会,1995.

山田真裕、飯田健『投票行動研究のフロンティア』東京:電算印刷株式会社,2009.

浅野正彦, 矢内勇生『Stata による計量政治学』東京:オーム社, 2013.

Appendix

本論文で使用した変数は次のとおりである。

- voteshare: 衆院選候補者が獲得した得票率(%)
- deviation_value: 衆院選候補者の卒業した大学の全学部平均偏差値
- foreign_university: 衆院選候補者の海外大学ダミー
- foreign_graduate_school: 衆院選候補者の海外大学院ダミー
- local_university: 衆院選候補者の卒業した大学の地元ダミー
- drop_out: 衆院選候補者の中退した大学の中退ダミー
- did: 都市度(%)
- seshu: 衆院選候補者の世襲ダミー
- nocand: 衆院選の選挙区内の候補者数(人)
- jimin: 衆院選候補者の自民党ダミー
- minshu: 衆院選候補者の民主党ダミー
- komei: 衆院選候補者の公明党ダミー
- kyosan: 衆院選候補者の共産党ダミー